

エッセイ

こんな日本でよいのか

山本文子

私が見てきた大日本帝国

歴史を辿ってみると、明治から大正そして昭和の敗戦までの日本、つまり大日本帝国は国民に過酷な労働を強いて貪り取る上に、殺戮好きの恐るべき独裁国家であった。

働けど働けどなお

我が暮らし 楽にならざり

じっと手を見る

と石川啄木（一八八六―一九二二）が歌ったように、一般国民は働いても働いても貧しかった。そのはずである。

敗戦直後のGHQの調べにより明らかになったところでは、天皇家の財産は三井や三菱財閥とは桁違いの多額であり（吉田祐一『天皇財閥』）、世界王国の国王の中でもトップだったそうである。労働の強制は生半可なものではなかった。戦後生まれの人は知らないかもしれないが、戦前の一部小学校校庭には二宮金次郎（後の二宮尊徳）の銅像や石像が立っていた。私が見たのは、背中に薪を背負い、片手に開き持った本を読みながら歩いている姿だった。二宮金次郎は勤勉、儉約の努力家だった。その精神を受け継いで、小学校の子供たちも時間を惜しんで働き、学べという訓示である。勤勉、儉約の言葉通り、私たちは小学生といえどもよく働いた。子守、水運び、雑巾掛け、使い走り

などをするのは当たり前であった。また、農家の子どもにとつて親から小遣いを貰うのは氏神様の祭日ぐらいであった。私など三銭貰っておでんが買えただけという記憶がある。お年玉を貰うなど一切ないし、誕生日を親から祝ってもらった習慣もなかった。

うことだろうか。

「月火水木金金」が提唱されて、商店、農業、漁業など自営業のほとんどは週休も月休もなく働き続けた。雨の日の農家は家内作業である。街へ出れば映画館や芝居小屋があったけれど、農民には見に行く時間がない。農民たちが遊べるのは年に一度の氏神様の祭りと正月ぐらいだった。祭りとは初詣。どちらも神社に結びついていることに、現在の私はこだわる。日本古来の神だというのが真実ならそれもよからう。けれど朝鮮半島からの渡来人である百済系帰化人の子孫が古来の神の上に乗っかって神を騙ったというのが真相だ。渡来人が古来の神であるうはずがない。だから彼らは渡来人であることをひた隠しにしてきた。嘘っぱちを本当らしく見せるための道具が、神社や神宮だったのである。私たち世代は小学校の修学旅行に伊勢神宮と二見ヶ浦へ行くのが定例になっていた。宿泊した旅館は高千穂館と浜千代館。この名称は二つとも尊皇そのものだ。修学旅行からして私たちは、天皇制を押し付けられていたとい

日本は敗戦によって一変した。国民を酷使し搾取した百済人とは大違いだったのが、日本を占領したアメリカ力である。占領政策は国民の働き過ぎにまずストップをかけた。週休制が始まった。農家に対して月に二日は休めとの指示があり、1日と15日は田畑へ出てはいけない、と定められた。初めて私は映画を観に行く楽しみが持てるようになった。

現在でも日本は自殺者の比率が先進国の中で一番高いけれど、敗戦以前の日本では特に老人の自殺が多かった。我が家の近くにこんもりと木の茂った二つの古墳があつて、その周囲は池になっていた。古墳の裏に電車の線路があった。森の中の首吊り自殺、池に入つての水死、線路への飛び込み自殺などがあり、走って見に行つたこともある。戦争が終わつてからも私の友人の家と、知り合いの家とどちらも老人が首吊り自殺されてショックだった。敗戦によつて「がむしゃら」から「ゆったり」の働き方に変わつてきていたし、それまで専業農家だった家では息子がサラリーマンや職人となつて兼業が増えたものの、当時は退職金とか恩給のない職種が多かった。そのため働けなくなつた老人は、必然的に息子夫婦におんぶすることになる。中

敗戦直後のGHQの調べにより明らかになったところでは、天皇家の財産は三井や三菱財閥とは桁違いの多額であり（吉田祐一『天皇財閥』）、世界王国の国王の中でもトップだったそうである。労働の強制は生半可なものではなかった。戦後生まれの人は知らないかもしれないが、戦前の一部小学校校庭には二宮金次郎（後の二宮尊徳）の銅像や石像が立っていた。私が見たのは、背中に薪を背負い、片手に開き持った本を読みながら歩いている姿だった。二宮金次郎は勤勉、儉約の努力家だった。その精神を受け継いで、小学校の子供たちも時間を惜しんで働き、学べという訓示である。勤勉、儉約の言葉通り、私たちは小学生といえどもよく働いた。子守、水運び、雑巾掛け、使い走り

には息子夫婦との折り合いが悪かったり、息子の収入が少なくて居場所を失う老人も出てくる。それが自殺に繋がってしまったのである。

「いまの老人は、年金が多くて幸せだが、私たちは年金が減るから損だ」

と老親を持つ人がぼやいていたけれど、いまの人たちよりも、ずっと多く働いたのに楽しみは少なかった年代の老人には、せめて終末期くらい幸運が与えられても罰は当たらない。老人の年金はそのまま子や孫を潤すことにも繋がるのだ。老親を養わなくてもよい、だけでも。

大日本帝国時代の政府は、他職よりも税金の取り易い農民から特に絞り取った。論外の安値で米を強制的に供出させるのだ。田畑の少ない山村では働き口もないため、男の子は年季奉公に出されたり、女の子は芸者町や遊郭へ身売りさせられたりした。年季奉公の子が休みをもらって親元に帰るのは年に二回だけだった。

戦時中、日本内地から慰安婦として駆り出されたのはそうした境遇の女性たちだった。韓国の騙されて連行された女性たちに比べればましかも知れないけれども、日本女性もまた酷い仕打ちを受けていたのである。敗戦までの日本は確実に人権無視、男尊女卑の国だったからだ。

。全てノンフィクションである。ごまかしなど加えないことを誓う。

皮膚科の体験

私のスネにはキズがある。二十年以上昔に皮膚科で受けた手術の痕である。左脚脛の内側にコロッケ大にえぐり取った傷痕があつて、ときどきビリビリ痛む。特に台風前など低気圧の近付くときは痛みが強烈になる。神経がちよん切られているためだ。リンパ管も切られてしまい、それが傷痕の下部に浮腫みとなって顕われている。その部分だけ感覚がないために自分の体として感じる事ができない。まるで石ころでもくっついていてみたいに重く感じて、手術の後しばらくはそれが気になって歩きにくかった。が、いつの間にもやら慣れたら重さを意識しなくなり、人間の体はうまくできているものだと感じた。

さてこの傷、そうした不快感が起こる度に、私の心中にはより強い痛恨の思いが噴き出てくるのだった。これは医師の怠慢、不勉強の結果作られてしまった傷痕だったからである。

小さなほくろを見つけたのが事の始まりだった。桜の頃だった。湯上がり体に拭いていて、ふと見ると小さなほ

慰安婦問題を許さない韓国の怒りが私にはよく分かる気がする。当時の女性がいかに男性から虐げられていたかを体験によって知っているからだ。大日本帝国の国民だった私もまた、違った意味で怒りがある。当時の為政者が、大和民族の仮面を被った百済系朝鮮民族であったことを近年になって知った。百済系帰化人でありながら、天から降った神の血筋だということになっていた天皇。その天皇のために実に多くの優秀な若者たちが死んでいった。日本国民は騙されていた。その悔しさ。猛烈な怒りを感じずにおれない。その怒りがこうした文を書く原動力になっている。韓国の人たちが怒っているのに負けないぐらい、強く、強く、私も怒っている。

私は噂話や人の悪口、陰口は聞くのも言うのも嫌いだけれども、その代わり、率直に書くことよって世の中の悪やごまかしを暴き出したい気持ちには、人一倍強烈である。書くことには責任が伴うから真剣にならざるを得ない。

民間に嘘がはびこるのは、日本の国体そのものが嘘まみれだからだ。普通の人は偉い人の真似をしたがる。偉い人が濁っていると普通の人も濁ってしまう。いまの私は、日本という国の汚さが目について仕方ない。この後に続けて、その中の一つであるところの医界への不信体験を綴ってみ

くろがある。何もなかったところに忽然と現われたようだ。気になって物差しを当ててみると直径が1・2ミリある。観察を続けると少しずつ大きくなっていく感じがした。年の暮れには2ミリ近くになった。大きくなるスピードが早いことに危機感を覚えた私は改めて拡大鏡で念入りに調べてみた。よくよく見ると、表皮は健全な皺がそのままの姿を見せており、黒点は表皮ではなくもつと奥深いところにある。あつ、これはいけない。これこそ皮膚癌の中で最も悪性度が高いとされる黒色腫の特徴だ。黒色腫以外の皮膚癌はたいてい紫外線の影響を受けて表皮にできる。それらとは異なつて、黒色腫だけは火傷や傷痕の後遺症として何年も後に出現する。私の場合、傷痕という条件もびつたりだ。というのは、十年前前に庭の木に登つてクワガタモチの剪定(私の趣味)をしている時に体重をかけている枝が折れ、枝もろとも地面に墜落したことがある。その時にどこで打つたのか、左脚脛の内側まさしくこの個所にかん大に丸くどす黒い打撲痕ができた。前にも後にも見たことのない大ききで、深さを感じさせてどす黒く気味悪かった。これにこりて、以来、剪定は庭師に任せることになったが、

さて、話を戻そう。黒色腫だったら大変だ。これはほつておけない。がんセンターの皮膚科へ行こうと思ひ立ってま

ず電話をかけてみた。女性の声で、「がんセンターに皮膚科はない。皮膚は見ただけで分かる場所だから難しく考える必要はない。皮膚科でさえあればどこでもよい」ということだったので、近くのA公立病院の皮膚科に行った。三人いる皮膚科医の中の長に当たる医師は一目見るなり、軽く言っただけだ。

「こんな小さな、心配ありませんよ。日本ではこれまでに4ミリ以下の悪性は発見されたことがないから。前癌の最大は6ミリで発見されているし」

放っておけばいいと言われるのを、どうしても心配だから切り取って欲しいと申し出た。無のところに出現して一年で直径が二倍近くという速いスピードで大きくなっていく黒点は、考えれば考えるほど怪しいのだ。切り取るのが刺激となって悪性化する場合があるから、疑わしいものは半径5ミリの余裕を持った大きさに切り取る、というのが常識であると医学記事で読んだことが頭の中に残っていた私は、医師が当然その大きさに切ってくれるものと思いついて手術を受けた。

ところが、手術が終わって傷の手当をしてくれる看護婦が

「これは良性ですよ。小さく切り取ってるから」

最初に5ミリ離さねばならなかったのに「

さらに私の傷を見て

「これはいけない。横へは5ミリ離しての再手術をしても深さが足りない。深さも5ミリ必要だった。深さが足りないうえに癌化して奥へ癌細胞が広がっていく恐れがある。メスを入れたときから三週間以内だったらそれを食い止める」

私はせっかく前癌状態で発見しながら、癌並みに大きく三度目の手術を受ける羽目になってしまった。

「残念でしたね。最初に5ミリ離して切っていたなら、一回で済んだものを」

と言われた。部長回診のときには、私は部長先生から大変な褒め言葉を頂いた。

「2ミリの前癌を自分で見つけるなんて凄い。こんな小さなものを発見したのは貴女が初めてです。日本の新記録を作りましたね」

あまり褒められるので、きまり悪くなって私は思わず両手で顔を覆った。

この傷痕の経緯については、ありのままを話しても決して人は信じてくれないということが、私には無念だ。家族

と言った。この一言に私は頭を殴られるような衝撃を受けた。

「大変なことになってしまった」

小さく切るのは危険である、と本に書いてあったのにそれをやらせてしまった。心が騒いだ。不安で居たたまれなけれど、検査結果を待つしかない。切り取った病変部の検査結果には一週間を要すると言われたのに一週間経っても来ない。なぜ？ 不安が一層高まる。二週間後にやっと結果が出た。「前癌」だった。癌細胞が見つかったけれども、まだ活動を始める前の段階だということだ。この結果を告げる医師の様子に私はただならぬものを感じた。医師の心が動揺している。「しまった。良性と信じ込んで小さく切ったのは失敗だった」とその顔には書いてある気がした。結局、さらに半径5ミリの大きさまで切り取る手術を受けることになった。それを受けたものの安心できなくて、私は医師に書いてもらった紹介状を持って癌専門医がいると聞いた隣のB大学の皮膚科を受診した。前癌と言われても本当は癌かも知れないと疑った私は紹介状の中身を見せてもらって、確認せずにいられなかった。

大病院の医師は

「何という危ないことをしたんですか。疑いのあるものは

と友達、つまり私という人間をよく知って信頼している人だけは分かってくれる。だが、それ以外は誰もが癌だったのを医師に騙されたとしか見てくれない。癌でないものを癌並みの大きさに切るはずがないと単純に思ってしまう、その思考の浅さは歯がゆい。こんな風だから百済民族にやられたっばなしになっているのだ。

後に別のことで国立病院の皮膚科を受診したとき、ついでにこの傷痕の成り立ちを話したところ、直ちに否定された。

「いや、それはやっぱり大きく切る必要があったんでしょ」

これほど細かく説明しても信じてくれない。分かってくれない。それとも、分からないふりをしているのだろうか。

整形外科の体験

関わることなので少し説明を入れる。一九八七年に夫が他界して、その初盆から私の身辺に霊現象が起り始めた。長期間に亘って多種多様の不思議現象を私と末娘は体験した。のみならず、親族、恩師、学友、仕事に来た人、友人、知人、初対面まで実に多くの人が私との交流において、タイムーや電話による不思議とか、金粉の出現を共に経験し

た。今これを書きながらその人たちを思い出し、指折ってみると三十人はいる。こうした体験から私は霊の存在を固く信じるようになった。霊に見守られている安心感が幸せをもたらして私は心が明るく安らかになった。生きることが楽しくなった。この喜びを人々に伝えたい、広げたいの思いから体験を本にまとめた。集約版として『増補版 私の不思議な体験』を刊行したのが二〇一二年。私はそれを図書館はじめ思い及ぶ限りのところへ送った。宛名書きから封印までおよそ四千五百通。これを一か月間ほど一人で続けていたら、左手が痛み始めた。ために一冊ずつ本を封筒に入れる作業は末娘がやってくれた。左手の痛みが続くので、D整形外科を受診することになってしまった。医師の前で私はまず痛くなった原因を知ってもらおうと、手を使い過ぎたことを説明した。さほど時間をかけたわけでもないのに、医師はろくに耳を傾けてくれず、軽く聞流しているのがありと分かった。血液検査の結果、CRPとMMP 3が陽性で、二つのリウマチ因子は陰性だった。二か月経過しても良くならないので、再び血液検査をすることになった。前回陽性だったMMP 3とも一つは前回と異なるリウマチ因子を調べたが、MMP 3だけが前回と同程度の軽い陽性を示した。医学書から得た知識で言

えば、MMP 3はリウマチでなくても陽性になる場合がある。私の場合、リウマチを診断する因子はこれまで三種類とも陰性だった。どう考えてもリウマチではなく、単なる手の使い過ぎが原因の腱鞘炎に思えた。なのに、医師はリウマチの疑いがあるから薬を飲みなさいと言う。リウマチの薬は副作用が強いと言われていて、それを疑いと称して飲ませようなんて。C国立病院の部長職を経たのち、開業した医師がこんな風とは。念のため、別のE整形外科で血液検査を受けたところ、ここでもリウマチ因子が二つとも陰性であり、あっさりリウマチではないと診断されて一件落着。左手はゆっくりと痛みが軽くなっていき、動かなくなっていた指は、入浴の度に自分で指を一本ずつ曲げたり伸ばしたり、四本全部を一度に曲げたりのリハビリを続けてきた。現在はすっかり痛みが消えて、かなりのところまで曲がるようになった。もう不自由はない。

その他もろもろの体験

小さなことだが、私に医師不信の心を抱かせたこと他にもあった。若いとき、ちよつとしたことで元軍医だったというF開業医の診察を受けた。求められて数日間の体温

を計り続けてそれを表に記入して持参した。その体温表を見て医師は「これはいけない。微熱が続いている」と言った。私は驚いた。それは違う。これは病気の熱ではない。女性特有のもので生理熱というべきか。私の場合は二十一日周期で正確に生理がくる。生理の直前十一日間は体温が〇・四度ぐらい高くなり、低くなったと思うと生理が始まる。十一日間は高いというものの一日の体温差は正常のときと全く同じであるから、断じて病的な熱ではない、と私は言い張った。が内科医は信じてくれなかった。医師への信頼が揺るぎ始めたのはその頃からである。

末娘が幼かった頃に、一時よく鼻血を出した。心配になって民間のG病院へ連れて行った。血液検査の結果、特に異状はなく、指でいじって鼻の血管を傷つけたためのものと分かって安心した。ところが何と三種類もの薬をくれた。どういふ薬が尋ねたら、三つとも止血剤だと言う。あほらしい。自然に止まる出血にそんなものはいらない。血を凝固させて逆に害になるだろう。私は一錠も飲ませずに全部捨ててしまった。

世の中には医師だというだけで全幅の信頼を寄せる人もあるようだが、私にはできない。私は職業だの肩書きだのによって人を価値づけることのない人間になった。

私が好きなのは、よく働き正直な人、賢くて温かい人、正義を愛する人たちだ。職業を問わず、何であつても道を極めた人は立派だ。そうした人たちが世の中を良くし、人々を幸せにしてくれる。肩書きだけが立派で中身が粗末なのは一番困る。名声や肩書きと無縁のところに、存在価値の高い人が溢れているのである。

姉の場合

私の医師不信の最大原因としては姉のことも見過ごせない。姉は数え三十三歳のとき、食道に食べ物がかかる気がする、と癌を心配してH国立病院で食道鏡による検査を受けた。その頃の姉は隣県に住んでいたが、夏休みを利用して実家から名古屋の病院へ診察を受けに行った。その検査の途中に姉は苦しみ始めて倒れ込み、病院側が呼んだタクシード実家へ帰ってきた。門前で止まったタクシーから降りた姉は動けず、その場にうずくまった。驚いた私と母が飛んで行って、二人で肩を貸して部屋へ連れ込み、布団を敷いて寝かせた。姉は苦痛のためものが言えない。胸がか背中だか分からないが酷く痛がる。何事が起つたのか分からなくて至急、近くの開業医の往診を求めたところ、よく分からないが胆石の発作ではないか、と言われた。

結局、何がどうなったのかさっぱり分からないまま、検査を受けた病院の診察を再び受けた。病院側は黙して語らずだった。その日から三年だったか四年だったか、姉の入院生活が続いた。高熱が続くので幾種類もの抗生物質が使われたが、効果がない。はかばかしくないもので、何か月後だったか工科大学病院へ転院した。後になって分かってきたことだが、心配した食道には病変はなかったものの、食道鏡による検査で食道と気道を圧迫したことから肺の胸膜が破れた。そのため吸い込んだ空気が二枚の胸膜の間に洩れて溜まり、それが浸出液に変わった後、細菌感染によって化膿し、結果として膿胸を発症したのだった。大学病院に変わって良かった。ここで胸に穴をあけて、そこから排膿する手術を受けて、ようやく快方に向かい始めた。手術であけた穴に差し込んだ管から常に膿が流れ出て、ベッド下に置かれたガラスの容器に溜まっていく。病室には膿の臭いが充満していた。何か月だったかその状態が続いた後、排膿が止まって、今度は胸にできた空洞を潰すための手術が行われたり、その後も記憶が定かではないけれど、修復のための手術が再三行われた。

国立病院へ入院した当初はまず母がつきっきりの看病に行っていて、私が母代りに主婦業を務めた。行きつきりは

辛かったこととてまず浮かぶのは、病院の水道水の冷たさだった。井戸水に慣れていた私には堪えた。病室には火種がないからせめてタオルでも巻いて凍えた手を暖めればよかった、と思ったのは後の祭り。結果として、看護に行っていて私の右手薬指が凍傷にかかった。甲側の根元が崩れて皮膚がずると剥がれて、爪大の丸い赤剥けができた。これほど酷い凍傷は後にも先にもなくて、このときだけだった。まるで火傷痕のようにつるつるの皮膚になって光っているため、この傷痕は折に触れ、姉を思い出させたり老いたいまは手が皸だらけになったため、それほど目立たなくなり、気持ちも楽になった。

ペニシリンを打っていた時期には夜中に二回起きて注射の痕をしばらく揉んであげるのだが、まだ二十代の娘だった私にとって、二度も起き上がったこの作業は辛かった。あまりの眠さに時間があつたら少しでも昼寝をしたいと考えて、布団を敷いたままにしていたら、医師の回診となりあわてたことがある。次の交代に来た母から叱られた。母は私の怠慢だと決めつけていたが、私は一言も弁解をしなかった。「だって眠かったもん」と心に呟いても、口には出せなかった。あのしゃべることが大変な姉が怒って告げたのだ、と思っただら悲しかった。

不都合が生じるので、やがて私と交互になり、そして日曜など義兄が代わってくれる日もあって、三人の交代制になった。当時は点滴がなかったのか、給食が重病人向きでなかったせいか思い出せないが、病人の食事は看護人が作った。コンロに火を起こして、普通の粥食より遙かに長い時間をかけて炊き、副食作りにも気を使った。どろどろの粥をスプーンで一口ずつすくって口に含ませるのだが、一口を噛んで飲み込むにも呼吸が荒くなるので、大変な思いをしているのが感じ取れた。湯呑一杯ほどの粥を食べ終るのにたっぷり一時間はかかる気がし、一日三回の食事は大ことだった。痩せ衰えて老人のように皸だらけになった太ももを見ると私は悲しくて涙が出た。二十代の私は人生経験が乏しい上に、気の利かないほんくら人間だから行き届かないことが多かったと思う。だが、私は私で辛いところが色々あった。何があっても、自分だけの心に秘めてこれまで誰にも語ったことはない。ここに書くのもためらわれて決心がつかず、初めて末娘に打ち明けて相談してみたところ、彼女は「迷うことではない。断然書くべきだ」と答えた。医療改善のためだから、と。言われてようやく私に書く決心がついた。姉よ、その家族たちよ。書くことを許して欲しい。

体が冷えるので湯たんぽを二個入れてあげるのだが、給湯室は病室からかなり遠かった。毎日、長い廊下を満タンに湯を入れた重い湯たんぽを左右それぞれの手につら下げて運ぶのは女にとっては結構大変だった。大晦日の夜、義兄が看護を代わってくれたので、雪のちらつく中を終バスで帰ったことがある。途中の夜道で酔っ払いに絡まれて、娘の身にはとても怖かった。大晦日の夜の街はどうやら酔っばらいいの天下らしい。

数日ぶりに帰り着いた我が家。留守中の埃がたまつたままの部屋で新年を迎えたくない。大晦日の深夜に私は一人で自分の部屋の大掃除に取り掛かった。しみじみ辛いと思つた。泣けてくる。しかし病人はもともと辛いと違くない。姉に病まれて、義兄や少女である姪たちこそ気の毒だ。が、母や私もその何分の一かの苦痛を味わつた。これほどに一族のみんなを苦勞させた元はと言えば、検査の失敗とその隠蔽にあつたのだ。少し曖昧な記憶であるが医療費の負担も大変で、手術をした月の一か月分負担額は借金ベースの1年分位だったように記憶している。義兄の心労はいかに大きかったことか。

ここで私が怒りを覚えるのは、検査の失敗もさることながら、苦しみのあまりその場にしゃがみ込み、動けない、

会話もできない重病人をタクシーに乗せて実家へ帰らせてしまったことだ。なぜ直ちに手当をしてくれなかったのか。病室へ運んでくれなかったのか。その対応の仕方は今でも思い出すとたまらない気持ちになる。

姉が軽快していく一方で、私は結婚して母親になり、やがて姉の家の近くに住むようになった。姉は何度かの手術によって小康を得て退院できたものの、体力は半減。心が暗くなり、悩みがちな性格に変わってしまった。姉は鬱が高じると終日、私の家に入り浸った。朝食のあとすぐに来る、夕食前まで私から離れないといったことが連日になって、食事の支度のための買い物にさし障る日もあった。離れ住む母や妹は姉からの電話の長さを嘆いた。病気になる前は別人のように明るく優しく賢い人だっただけに無念である。医療過誤が恨めしい。検査から十数年後に四十代で姉はこの世を去ってしまった。

「ここが思ったこと」

日本にはなぜこれほど粗末な医療がまかり通っているのだろう。高校の同窓会に出席した後で「成績の悪かった奴が医者になっているんでびっくりした」と言った男性がある。国立医学部のレベルが高いためそこへは入れない人が、

お金の力で進学できる低レベルの大学の医学部が存在し、その卒業生が問題を起し易い、という記事を読んだこともある。能力の低さなのか不勉強なのか、それとも患者への愛の欠如かと考えさせられるけれども、しかし何といてもそついつ医師をつくってしまう医師養成制度そのものに問題があるように思える。

国民の命を軽視する組織（中心に百済系帰化人の子孫）が日本を支配し続けているからこついつことになるのではないだろうか。つまり特攻兵器をつくって多くの若者を殺してしまつたあの精神が現在も生き続けているため、他の先進諸国に見られる人間尊重の姿勢が、日本には不足しているということが考えられる。

国民の命を大切に思う人が上に立つてくれることによつて、はじめて国の医療レベルは上がっていくであろう。強い国などはもう沢山だ。そんなことよりも国民一人一人の命が大事にされる日本になつて欲しい。

(二〇一四年三月二十九日)